

|           |                                       |
|-----------|---------------------------------------|
| 氏 名       | さ とう あき ひろ<br>佐 藤 昭 裕                 |
| 学 位 の 種 類 | 博 士 (文 学)                             |
| 学 位 記 番 号 | 論 文 博 第 492 号                         |
| 学位授与の日付   | 平成 17 年 7 月 25 日                      |
| 学位授与の要件   | 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当               |
| 学位論文題目    | 中世スラブ語研究<br>——『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語—— |

論文調査委員 (主 査) 教 授 庄 垣 内 正 弘 教 授 中 務 哲 郎 教 授 田 窪 行 則

### 論 文 内 容 の 要 旨

スラブ世界における最も古い文献言語としてスラブ語の史的研究に重要な役割を果たすのが、9世紀末に福音書、詩篇、その他教会文書の翻訳のための言語として、南スラブ系の一方言をもとに成立した古教会スラブ語である。しかしそのテキストは、翻訳言語としての性格により、語順や動詞のテンス・アスペクト形式などの点で可能な限りギリシア語原典の形を尊重したものであり、統語法、文法形式の意味といった分野において、この言語をもとにスラブ語本来の特徴を知るには限界がある。これに対し、キエフで12世紀はじめに成立した年代記『過ぎし年月の物語』は、時代的には2世紀以上も遅れるものの、当時のロシア人（東スラブ人）の手に成るものであり、初期スラブ語の統語論、意味論研究、さらには談話構造の解明に対しては、古教会スラブ語以上に重要な資料となる。さらに両者の間には、この『過ぎし年月の物語』の言語をはじめとする、10世紀から13世紀にかけてのロシアにおける文章語の成立と発展に対し、古教会スラブ語が大きな役割を果たしたという関係がある。この点で、従来もっともよく研究されてきたのは、音韻論、形態論を含む語彙面での影響であり、統語論の分野での研究は十分ではない。さらに談話やテキストレベルでの研究は皆無といってよい。

本論文は、このような初期スラブ文章語の成立の事情と、その研究の現状を背景に、古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の言語の総合的研究を目指すものである。その際、つぎの四つの観点から分析が進められる。すなわち、1)『過ぎし年月の物語』のテキストの構造、2) 結束的 (cohesive) なテキストを形成するために使用される種々の言語手段の働き、3)『過ぎし年月の物語』の現在のテキストが成立した過程、4) 古ロシア文章語の成立と発展に対する古教会スラブ語の影響、である。全体は序章と終章を別にして六つの章からなる。

第1章の議論は、『過ぎし年月の物語』のテキストの構造と言語的特徴の関するものである。その際、従来研究されてきた音韻、形態、語彙レベルの特徴ではなく、結束的なテキストを形成するための言語手段、すなわち時制形式、語順、照応形といった要素の働きに着目して議論を進める。まず、この年代記のテキストが大きく「事実叙述」タイプと「コメント」タイプという二つのタイプのテキスト部分からなること、そしてそれらが交互に現れることにより、全体の叙述が進められていくことが示される。前者は歴史的な出来事を事実としてそのまま述べる部分であり、後者は、それに対する年代記作者、編纂者のコメント、評価の部分である。従来の語彙中心の研究方法によるとすれば、論者の言う事実叙述の部分は当時のロシア人の話し言葉に近い言語で書かれ、コメントの部分は、聖書からの引用を多く含むことから、必然的に文語的、古教会スラブ語的要素を多く含む、ということになる。しかし論者が着目した時制形式、語順、照応形といった談話的、テキスト的な要素について見ると、逆に事実叙述の部分は特別なスタイルの書き言葉で書かれ、コメントの部分の方が、当時の日常の話し言葉により近い言語で書かれていることが明らかになる。以上の結果は、実際のテキストの読みと、統計的調査の両面から論証される。

第2章では、『過ぎし年月の物語』のテキストの成立の過程と、第1章で明らかにされたテキストの構造の関係が論じられる。A. シャフマトフは、20世紀初めに公刊されたいくつかの研究において、この年代記のテキストが6次に亘る編纂・集成の過程を経て完成したことを示した。すなわち、1) 1039年版「最古の集成」、2) 1073年版「ニコンの集成」、3)

1093年版「はじめの集成」、4) 1113年版ネストル編『過ぎし年月の物語』第1版、5) 1116年版シリヴェストル編『過ぎし年月の物語』第2版、6) 1118年版『過ぎし年月の物語』第3版である。この提案は、細部についてはさまざまな異見があるものの、多くの研究者によって基本的に受け入れられてきた。そこで、『過ぎし年月の物語』のテキストの構造について論者が第1章で行ったような提案をするとすれば、それがシャフマトフによって示されたこの年代記の成立の過程とどのように関係するか、という議論を避けて通ることはできない。論者はシャフマトフによって提示されたそれぞれの版の再構成テキストと現存の『過ぎし年月の物語』のテキストを照合し、現存のテキストの中にこれらの集成の過程がどのように反映されているかを確認する。その上で、論者が提案した事実叙述のテキスト部分とコメントのテキスト部分が交互に現れることにより叙述が進められていくというこの年代記の構造が、すでにシャフマトフの考える1039年版「最古の集成」の段階で基本的に完成していたことを示す。そして論者は、この構造に従って、あるいは事実叙述の部分でさらに詳しい事件の状況が述べられ、あるいはコメントの部分で聖書からの引用が追加されるといった形で、テキストが充実し、次第に現在みられるテキストが完成していった様子を明らかにする。さらに、それぞれの版ごとの、あるいは最初の三つの版と『過ぎし年月の物語』としての三つの版といったグループごとの違いを明らかにすることを試みる。

第3章では、古教会スラブ語の発話動詞 *glagolati* と *rešti* の意味と用法が議論の対象となる。とくにギリシア語の歴史的現在 *λέγει* に対応するアオリスト *glagola* と、アオリスト *εἶπεν* に対応するアオリスト *reče* の意味的な差異、そしてテキスト中の分布の違いが問題とされる。古教会スラブ語訳福音書をデータとした議論の結果、*glagola* は継起的に行われる一連の行為の一つとして発話行為が生じた場合、すなわち発話行為が生じるかどうか予測困難な場面で発話行為が生じた場合に使用されること、一方の *reče* は、たとえば対話の場面をその典型とするような、予め発話行為の生起が予測可能な文脈で使用されることが示された。その結果、前者の使用においては、まず発話行為の生起そのものを確認することが重要となり、発話者や発話の内容はそれほど重要ではないことになる。一方、後者の使用に際しては、必然的に発話内容の伝達の方が重要になる。ここで、『過ぎし年月の物語』の言語との関連で興味を惹くのが、対話の文脈に現れ、主語の交代を示す *reče* と小辞 *že* の共起である。第1章で見た『過ぎし年月の物語』の事実叙述タイプのテキストを特徴づけるものとして、*SzeV* (主語+強調の小辞 *že* + 動詞) 構文の使用が挙げられる。古教会スラブ語訳の福音書において、発話動詞 *rešti* のアオリスト *reče* もこれとまったく同じ形で現れるのである。すなわち、第1章の分析で、語彙的には古教会スラブ語の影響を受けていない一方で、特別なスタイルの書き言葉であるとされた、事実叙述タイプのテキストの言語についても、やはり古教会スラブ語の影響を考えなければならないということになる。

第4章と第5章では、『過ぎし年月の物語』に現れる「死ぬ」を意味する二つの動詞 *umьrěti* と *prěstavisja* について議論した。まず第4章でこの二つの動詞の意味記述を行い、ついで第5章では両者の年代記テキストにおける分布の違いを明らかにした。第4章の議論の出発点は16世紀に編纂されたイオシフ・ヴォロコラムスキ修道院文書に見られるノヴゴロドの市長官ドブリニャの悲惨な死である。このドブリニャと『ノヴゴロド第一年代記』の1117年の記事に見られる同名の市長官ドブリニャは果たして同じ人物なのか、もしそうであるとすれば、ドブリニャは本当にこの物語に述べられたような死に方をしたのだろうか？この問いに答える鍵の一つが『ノヴゴロド第一年代記』で彼の死を表すために使われている動詞 *prěstavisja* の意味である。種々の用例を検討した結果、*umьrěti* は自然死、他者による殺害といった死因を問わず、人の死を一般的に指すために用いられることが分かった。一方、問題の *prěstavisja* は自然死の場合に使用されることが示された。そして、もし人が尋常でない死に方、すなわち戦闘や災害、水害によって死んだ時、あるいは他の人に殺された場合は、他動詞 *ubiti* 「殺す」を用いるなど、具体的な行為、状況を示す動詞を用いてその死に方を具体的に述べるのが普通であることも観察された。さらに、当該人物に対する敬意が示されているかどうかという点について、*umьrěti* は人が死ぬことを意味する無標の表現であり、使用される対象について特別な制限はないこと、一方 *prěstavisja* の使用はルシの人々、すなわち正教徒に限られること、その際、キリスト教徒として死んでいった人々に対する宗教的な意味での敬意が示されることが示された。

第5章では、この二つの動詞について、テキスト内の分布という観点から分析を行った。まず、どのような文脈に現れ、どのような要素と共起するかという意味での分布について調べた結果、*prěstavisja* は当該の人物の死んだ日付の他、どの教会に葬られたか、葬儀はいつか、後継者は誰かとといった情報、またその人物が重要な人物である場合は、その功績や人柄

を称える言葉、すなわち第1章で見た年代記作者によるコメントを伴って現れ、当該の人物の死を公式に報告し、記録するための「死亡報告」として使用されることが明らかになった。一方 umbrěti は、このような定型的な報告の中で現れるのではなく、一連の事件の流れの中で時間軸にそって当該の人物の死を語り、描写するために使われることが示された。ついで、それぞれの動詞が年代記テキストのどの年代部分に現れるか、さらにはシャフマトフの言う六つの版のうちのいずれに起源を持つかという意味での分布を見た。まずどの年代部分に現れるかについては、調査の結果、umbrěti の方は862年の記事（全286コラム中の第20コラム）から、prěstavisja の方は1000年の記事（同第129コラム）からというように、umbrěti の方が早い時代に使用が始まることが分かった。さらにシャフマトフによる『過ぎし年月の物語』の成立の過程を考慮にいと、両者の差はさらにはっきりする。すなわち、umbrěti が最も古い1039年版「最古の集成」の段階から使用されているのに対し、prěstavisja は1073年版「ニコンの集成」で書き加えられたテキスト部分ではじめて見つかると、さらに完全に自由な使用が始まるのは、1093年版「はじめの集成」からであることが分かる。以上のような両者の分布の違い、すなわち prěstavisja の使用が遅れて始まったという事実は、この動詞が umbrěti とは異なり、ロシア語本来の形式でなく南スラブ系の語彙であること、キリスト教の受容とともに外来語としてロシア語の中に導入され、当初は教会や修道院といった宗教的環境の中で使用され、そこから次第に使用の範囲が広まり、年代記の中での使用も定着していったということによって説明される。

最後の第6章では、第1章で議論から除かれた『過ぎし年月の物語』のコメントタイプのテキスト中に現れる聖書本文からの引用について考察される。年代記に引用された聖書テキストと、『新約聖書』『七十人訳聖書』のギリシア語本文、またスラブ語訳の聖書テキストを対照した結果、年代記中に見られる聖書からの引用は、聖書原典のテキストにきわめて忠実な形で引用されていることが分かった。同時に、その際、当該部分のテキストの全体がそのまま引用されているわけではなく、むしろその一部だけが選択的に引用される場合が多いこと、さらには、その省略が大胆かつ巧妙に行われ、省略されずに残った部分だけで完全に意味の通る、いわば新しい行文が出来上がっている場合があることも観察された。そして、いずれの場合も、顕在的に引用されている箇所は極めて忠実な翻訳、引用である点が特徴的である。これらの例を見ると、年代記編纂者は何らかのスラブ語訳聖書テキストを傍らに置いて参照し、その中から適宜必要な部分を抜き出す形で、引用の作業を行ったという推定が可能になる。また年代記作者が、本来の聖書本文にあった動詞の人称を変えることにより（例えば3人称から2人称へ）、読者、すなわちルシの人々への訴求力を高めるといった技法を用いたり、引用に際して本来の文脈から切り離され、指示対象が不明瞭になった代名詞を名詞で置き換えるといった工夫をしていたことも確認された。以上の観察は、古文献中における聖書引用の類型的研究につながるものとして重要である。

以上、本論文は、古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の言語について、テキストの構造と種々の言語形式のテキスト内で果たす機能、現行のテキストの成立の過程、その中で見られる古教会スラブ語の影響といった観点から、総合的な分析を行い、従来の語彙、音韻、形態レベルを中心とした研究を越え、多くの新しい観察結果を提示するものである。

## 論文審査の結果の要旨

スラブ世界における最も古い文献言語としてスラブ語の史的研究に重要な役割を果たすのが、9世紀末に聖書を初めとする教会文書翻訳のために南スラブ系の方言をもとに成立した古教会スラブ語である。しかし、翻訳言語としての性格から、統語法や文法形式の意味といった分野では、この言語をもとにスラブ語本来の特徴を知るには限界がある。これに対し、12世紀初めにキエフで成立した年代記『過ぎし年月の物語』は、時代は遅いものの、当時のロシア人（東スラブ人）の手に成るものであり、初期スラブ語の統語論、意味論研究、さらには談話構造の解明にとっては、古教会スラブ語文献以上に重要な資料となる。

本論文はこのようなスラブ世界における文章語成立の歴史を背景に、『過ぎし年月の物語』の言語の総合的研究を目指すものである。全体は、序章と終章、他6章からなり、論者がこれまで発表した5編の論文を中心に発展させ、全400ページにまとめたものである。論者はこの年代記について、1) テキストの構造、2) 結束的なテキストを形成するために用いられる言語手段の働き、3) 成立の過程、4) 古教会スラブ語の影響、という四つの点に着目し、それらの関係に注意しつつ記述を進めた。従来の研究は、個別の文法形式を単独で取り出してその意味の記述を試みたり、語彙的な面からのみ個々の

文献の特徴を示そうとする単純なものであった。以下、章ごとにその主要な論点を紹介したい。

第1章では『過ぎし年月の物語』のテキストの構造と言語的特徴について論じる。まず論者は、この年代記の叙述が、歴史的出来事を事実として記述する部分と、それに対する年代記作者のコメントの部分とが交互に現れる形で進められていることを示す。従来の語彙中心の考えによれば、前者は本来のロシア語で書かれており、後者は、聖書からの引用を多く含み、必然的に文語的、古教会スラブ語的スタイルで書かれていることになる。しかし、論者はここで、動詞の時制形式、語順、照応形といった結束的なテキストを形成するために使用される言語手段の働きに着目することにより、前者が特別な語りのスタイルで書かれていること、むしろ後者のコメント部分の方が、日常の話し言葉の言語に近いことを明らかにする。テキストの正確な理解と優れた着眼点に基づく説得力のある議論といえる。

20世紀の初め、A. シャフマトフがこの年代記のテキストの成立の過程についての研究を公刊した。1039年版「最古の集成」からはじまって1118年版『過ぎし年月の物語』第3版に至るまで、六つの版があったという主張である。第2章では、このシャフマトフの提案と、第1章で論者が明らかにしたこの年代記の構造の関係が、述べられる。分析の結果、論者が主張する、事実叙述とコメントという二つのタイプのテキスト部分が交互に現れて叙述が進行していくという基本的な構造は、シャフマトフの言う1039年版「最古の集成」の段階ですでに成立していたことが示される。そして、新しい版の編纂者たちが、このパターンに従い、あるいは事実叙述部分の記述をふくらませ、あるいはコメント部分に追加するといった形で叙述を充実させ、次第に現行の『過ぎし年月の物語』のテキストが完成していった様子が論者によって明らかにされる。

第3章は、古教会スラブ語の発話動詞 *glagolati* と *rešti* について、とくにそのアオリスト *glagola* と *reče* の違いを考える。観察の結果、*glagola* が発話行為の生起が予測されない文脈で生じるのに対し、*reče* は対話等、それが予測される文脈で使用されることが示された。さらに、*reče* の使用に際しては、発話の内容が重視され、たとえばイエスによる重要な発話が導かれるのに対し、*glagola* はそのような働きを持たないことなどが示された。ここで年代記の言語との関係で興味深いのが、第1章の議論で、事実叙述の部分でしばしば用いられ、それが特別な語りのスタイルで書かれていることの根拠の一つとなった *SžeV* (主語+強調の小辞 *že* + 動詞) 構文が、古教会スラブ語では *reče* を述語として頻出するという事実である。これは、語彙レベルで古教会スラブ語の影響を受けていない事実叙述のテキスト部分が、統語レベル、テクストレベルではその影響を受けていた可能性を示すものとしてとくに興味深い。

第4章、5章は、古ロシア語における死を表す動詞 *umbrěti* と *prěstavitisja* を扱った議論である。まず第4章で、二つの動詞の意味分析を行い、*umbrěti* は特に制限なくあらゆる死を表すこと、*prěstavitisja* はキリスト教徒の平穏な死を表すことを明らかにする。その上で第5章では、それぞれの動詞のテキスト中における分布を検討する。そして、前者が一連の事件の流れの中で人の死を述べるために使用されること、後者が主として公人の死亡を報告するための定型化した表現として使用されることを示す。さらに、シャフマトフ提案の年代記の成立過程との関係において、*umbrěti* が最初期から使用されているのに対し、*prěstavitisja* が自由に使用されるようになるのは1093年の「はじめの集成」以降であることを明らかにする。それぞれの動詞の意味記述、そして年代記テキストにおける分布を明らかにする作業は、精密かつ網羅的で、信頼できるものといえる。

最後の第6章では、年代記のコメントタイプのテキスト中に引用された聖書本文が分析される。「新約聖書」「七十人訳聖書」のギリシア語原典、そして古教会スラブ語訳テキストとの対照の結果、実際に引用されている部分は本来の聖書テキストにきわめて忠実である一方、引用に当たって大胆な省略、あるいは異なる箇所から抜粋・結合して新しいテキストをつくるといったことが行われていること、また読者に訴えかけるためにさまざまな工夫のなされていることが示された。古文獻における聖書引用のタイポロジーを提示したものとして、重要である。

以上、いずれの章の分析も、テキストの精密な読みと、大量のデータを用いた統計作業に基づいている。細部と全体を見通し、きわめて慎重な分析結果を大胆な結論へと繋げる論者の手法は鮮やかであり、また説得力に富んでいる。『過ぎし年月の物語』を言語学的にこれほど包括的かつ詳細に分析したものは他にない。本論文内容が古代ロシア語研究に貢献するところはきわめて大きいといえる。

しかし、本論文にも欠点がない訳ではない。論者は証明不能な問題に対してはあくまでも慎重な態度を崩そうとしない。例えば、シャフマトフによる『過ぎし年月の物語』成立の過程を主要な論点としながらも、つねに「もしシャフマトフの提

案を受け入れるとすれば」といった形で慎重に言及し、論者の立場からその提案の是非を論じることをしない。このような点において読者は若干の不満を感じるであろう。しかし、これとても、論者の実証性を重んじる態度を示すものと言えるかもしれない。いずれにしても本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年7月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。